サル学事始めの頃と今日の課題

伊 谷 純 一 郎

日本に霊長類の研究が産声をあげましてから37年目にして、本日ついに日本霊長類学会の発足の日を迎えましたことを、皆様とともにお慶び申し上げたいと存じます。

本日のこの記念講演は、今西先生にお願い申し上げたいという事務局の意向だったのですが、「わしはもう年をとったから話すのはいやや」とおっしゃいまして、私にお鉢がまわってまいりました。ニホンザルの研究を最初に手がけましたのは、今西先生と川村俊蔵さんと私の三人で、川村さんはインドネシアへ出掛けておられます。

このようなわけで、サル学事始めの頃のこと、そして古いスライド等もいく枚か御覧いただき、この学問の現状と課題といったことにつきまして私見を述べさせていただき、塚田先生の御講演、さらに加納さんのピグミーチンパンジーの映画の上映の前座を勤めさせていただければと存じている次第です。

日本の霊長類学のスタートは、1948年の初冬に宮崎県の都井岬でということになっております。もっともその前年の1947年に、今西先生はこの岬の大谷という谷で、サルの群れに出あわれたということをお聞きしております。1948年には、今西さん、川村さん、私の三人で、ニホンザルの研究に着手しようと話しあい、馬の調査の4日ばかりを割いて、御崎の北約12kmの幸島を訪れました。

今では、日南海岸の立派な道ができていますが、当時は一人一人通れるだけの細道が海岸の急斜面につけられており、それは12月の3日のことでしたが、白い野菊が一面に咲いていたのを思い出します。大納では、門田慶作さんという猟師からサル

図1. 1950年4月、九州背稜山脈夏木山縦走のあと、今西先生と私。私は靴を焼いてしまっただけで裸足だった。

のことをいろいろと聞き、川村さんはサルの右手をもらい受けて、さらに名谷という小集落を通り、市木の泌にたどり着きました。冠地さんのお宅の二階に泊めていただき、冠地藤市さんから幸島のサルのことをうかがい、島に渡りました。

大泊の湾はうっそうとした常緑樹に囲まれ、その奥の左手には磯崎さんの家があって、南洋の小島にたどり着いたような錯覚におそわれたのを思い出します。島を一巡しましたが、このときにはサルの糞と食痕を見ただけで、サルの姿を見ることはできませんでした。終戦直後に進駐軍の将校がサルを手に入れようとし、兵隊が追いまわした

Japanese primatology in retrospect and in prospect

Junichiro ITANI, Lab. Human Evolution, Studies Kyoto University, Sakyo, Kyoto 606, Japan
〒606 京都市左京区 京都大学理学部人類進化論研究室

のでサルは人を恐れているということでした。しかし、これが最初の計画されたニホンザルの調査だったのです。

こうして私たちは都井に戻ったのですが、岬では幾度かサルの群れに出あっています。小松カ辻の丘の南にジバエという深い杉林があり、それを抜けると南の海を眼下に見おろす鯨カ瀬と呼ぶ尾根が海に向かって伸びています。その尾根を右から左に越えていったサルの群れの印象を、私はいまも忘れることができません。互いにたわむれあい、呼び合い、しかもなにか不思議なまとまりをもって、数分間のうちに私たちの視野から消えてゆき、鯨カ瀬の向うはただ逆光の海が光っていたのですが、このわずかに数分間のサルたちとの出会いの中に、その後私たちが追求めたこの社会のもつあらゆる要素が凝縮されていたように思うのです。

その後、私たちは都井岬、幸島、高崎山、箕面、嵐山、比叡山、小豆島、帝釈峡、房総半島、そして遠く下北や津軽、十和田、三面、さらに屋久島などのサルの生息地を歩きまわりました。京都では、宮地先生と今西先生を中心にして霊長類研究グループをつくり、仲間の数も次第にふえてゆきました。その研究会では、野外で得た情報を報告し、徳田さんは動物園のサルの観察結果を、河合さんはウサギの、藤本さんはネズミの研究結果を報告し、カーペンターやヤーキスを読み、集めた資料はガリ版刷りの報告書にしました。

川村先生が箕面でつかまえてきたタキという雌ザルを間先生のお宅の庭先にあずかっていたいていましたが、タキは子を産み、それにモンという名をつけました。やがて宮地先生の御努力で、動物学教室の中庭に立派な檻をつくっていただき、タキ一家はここに収容いたしました。

戦後の経済的に疲弊しきった時代でしたが、双眼鏡と野帳さえあれば、そして旅費さえ手に入れることができれば、調査を進めることができました。東北地方や九州ゆきの旅費を渋沢敬三先生にいただいたことを思い出します。当時、日銀の総裁をなさっていた頃と思いますが、よくも乞食のような学生のスポンサーになってくださったもの

図2. 渋沢敬三先生。日本の霊長類学誕生の頃のよきパトロンであり、日本モンキーセンターの初代の会長であった。

だと、このことは忘れることができません。

1951年に『自然』に掲載されました今西先生の「ニホンザルの自然社会」、同じ年に出版されました今西先生の『人間以前の社会』の中にとりあげられましたニホンザルの資料、1953年に『生理生態』誌に掲載されました間先生と私の「ニホンザルの発達と母子関係」、そして1952年にガリ版刷りで出しました川村さんと私の『屋久島のシカとサル』などが、日本の霊長類学的研究の最初の報告書でありました。

こうして、1952年の8月11日に、徳田さんと私がついに幸島のサルの餌づけに成功いたしました。その詳細は『幸島のサル』に書いておりますので、ここでは繰り返しません。これが日本の霊長類学のその後の歩みにとってきわめて重要な意義をもつできごとであったということは申すまでもございません。

この1952年という年に、私は19冊のフィール

図3. 1952年8月、幸島の大泊での餌づけの成功の直後に撮影した最初のニホンザルの写真のうちの一枚。第2位のアカキン。

ド・ノートを残しているのですが、いまそれらを繰ってみますと、調査は幸島に重点が置かれており、6月までは幸島、7月には屋久島の最初の調査を川村さんと二人でおこない、8月に幸島の群れの餌づけの成功、9月には『屋久島のシカとサル』を出し、そして10月には私が単独で下北、

図4. 幸島に渡る。左より徳田喜三郎氏、中央、今西先生、そのうしろ、川村氏、右、河合雅雄氏。

八甲田、十和田、三面、小国の調査をおこない、11月に幸島に戻って年を越しています。

そしてこの年から、東京大学伝染病研究所の安東洪次先生、厚生省予防衛生研究所の田嶋嘉雄先生たち、つまり実験動物研究グループの方々との共同研究が始まっています。安東先生たちが用意していただきました文部省の試験研究費によって、私たちの活動はさらに盛んになり、またその範囲も広がったのです。

図5. 1950年頃の屋久島。実験用サルの収集に駆けまわった頃。当時まだ「ドヤ畏」が使われていた。

図6. 1952年当時の幸島のオオトマリ湾の奥、磯崎氏の家はのちに向って右に移された。

それにしましても、あの当時はどうして一つ一つの調査がいまも忘れ得ぬエピソードで彩られていたのか。いまの若い人たちも同じように動きまわっておられるのですが、そんな話しはほとんど耳にいたしません。それはいったい何故だったのでしょうか。

1950年4月23日、祖母山と傾山^{ほんたに}の間の本谷山で、私がギボウシと間違えてバイケイソウの芽立ちを摘み、その夜それを食べて今西さんと私はひ

のニワトリを殺し山を焼いたのか」と、大変な歓待にあずかりました。

ルース台風の直後に、徳田さんと私が伝馬で幸島に渡ろうとして沈没し、私は全財産の入ったリュックを引きずったまま波にもみくちゃにされて市木の浜にたたきつけられ、徳田さんは磯崎さんの妹さんと相扶けながら島に渡りました。これは笑い話ですみましたが、吉場健二君はこの同じ瀬戸で亡くなっておられます。

図7. 1950年4月、夏木山縦走のあとの私。靴がないので裸足にタオルを巻いていた。

どい中毒をおこし、新婚早々の川村さんは難を逃れました。泊めてもらった営林署の事業所の所長不在中の出来事で、客が来てもニワトリはつぶすなど所長が女中に言いおいたそのニワトリは、私たちが吐いたものを啄んで全滅し、私たちは山に逃げたのですが、罰があたったのでしょうか、昼に茶をわかそうとして杉苗の山を焼き、私はリュックも靴も焼いてしまって、裸足で夏木山の縦走に参加し、月光を頼りにセトグチ谷という谷におりました。あとでわかったのですが、これはこのルートのファスト・トレースだったとのこと。実は、この事業所の所長古屋敏治氏には、1952年に屋久島の永田でつかまり、「あんた方がわし

川村さんと二人で屋久島の川原の一軒家の主人から聞き込みをしている最中に、突然部屋の奥から腰まで黒髪をたらした全裸の女性が私たちに向かって突進してきました。私たちは先を争って逃走いたしました。昨年久し振りに屋久島に行って、この主人は亡くなったが女性の方は健在だと聞かされました。

高崎山の別院に住んでいましたとき、幽霊が出たこともあります。暗い玄関に立ったその無惨な顔の男が笑うので背すじが寒くなったのですが、実は幸島でうるしにかぶれて帰途高崎山に立ち寄った河合さんだったのです。高崎山では、自殺未遂の男を夜通し看病したり、爆発音がしてサルた

図8. 高崎山の万寿寺別院隠寮でサルを飼育する。前列左より3人目、宮城道雄氏、右端は大西真応和尚。

ちが山に逃げだしたので藪の中に入ってみると爆弾自殺の現場だったりといったこともありました。

毒草と山を焼いたのは私の落度でしたが、あとはどれも偶発的事件で、あの頃どうして奇妙な事件が多発したのか、いまでも不思議に思っています。しかしやはり、いまの若い人たちと当時の私たちとの間には、何か違いがあるような気がしないでもありません。いまの人たちは、きちんとした計画を立ててフィールドに出てゆかれる。それに対して当時の私たちは、ロマンを求めて野外に出ていったと言えなくもないような気がするのです。

こうして、1956年には財団法人日本モンキーセンターが設立されました。木曾川の日本ラインの左岸の山にはかつてサルがすんでいた、それを復元したいというのが名古屋鉄道株式会社のそもその発案でした。当時の名鉄の副社長土川元夫氏の英断によるものと思うのですが、ついに日本モンキーセンター（JMC）の設立の運びとなったのです。これは戦後逸早く実現した産学共

図9. 日本モンキーセンター以前の栗栖。桑と大根の畑だった。

同の見事な例で、生態学の宮地、今西両先生、実験動物学の安東、田嶋両先生、名古屋財界の土川氏の三者が、私たち貧乏学生の活動力を信じて打った賭であったとしか言えないように思います。そして、センターの会長は、私たちへの喜捨を惜しまれなかった渋沢先生が心よくお引き受け下さ

いました。日本の霊長類学の最初の礎が、官制の中で芽生えたのではないということを、私は私自身の一つの誇りに思っております。こうして、野育ちで、野となり山となるともわからなかった私たちは、はじめて立派な研究の拠点をもつに至ったのです。

しかし、高崎山におりました私は、犬山に行けと言われ、1956年2月にはじめて犬山を訪れたのですが、これはいったいどういうことになるのかと思いました。あたり一面は大根畑と桑畑です。ここに日本モンキーセンターとやらをつくり、この山にサルを放す、そして実験用のサルの供給をする。まず私は、これまでに私自身がやってきました野生のサルの追跡とは、それがまるで無縁の事業であることを悟りました。

けれども、河合さん、黒沢慎六郎さん、広瀬鎮さん、竹下完さん、葉山杉夫さん、都守淳夫さんといった同僚がつぎつぎにでき、桑畑はサル小屋に変わり、センターの新しいオフィスもできて、こ

図10. 1957年、大根畑の中に、日本モンキーセンターのオフィス兼研究室兼宿舎が建てられた。

の事業は着々と軌道に乗ってゆきました。もちろん、名古屋鉄道の多くの方々の熱心な御協力があったはじめてできたことなのですが、私はあの当時のきわめて無鉄砲な、そして私自身にとっては研究業績のほとんど皆無であった建設のための数年間を、いまでも大変懐かしく思い出します。そしてこれは、私たちが実際にやりおせたことなのですが、あの荒地同然の松の丘が、いまのセンタ

図11. 日本モンキーセンター初期の研究員。右より河合氏、吉場健二氏、竹下完氏、私、広瀬鎮氏、小寺重孝氏。

一の動物園になっているということ、それは私にとりまして非常に不思議なことでもあるのです。

JMC発足後わずか2年で、アフリカに調査隊を出すことになりました。もっとも東南アジアへの調査隊はその前年の1957年から活動が始まっています。最初のJMCの調査隊は、ゴリラの予察

図12. 1965年アフリカに向かう。左より西田利貞氏、加納隆至氏と私。珍談奇談に彩られた、日本霊長類学の浪漫派時代の最後を飾る調査。

を目的として、今西先生と私が出かけ、東から西に赤道を横切り、最後はカメルーンの森の中に入ってヨーロッパに抜けました。それから実に27年間、アフリカでの研究は1年も休むことなく続いて多くの業績をあげ、本年はついに日本の研究者の長年の努力によってタンザニアのマハレ山塊国立公園の設立を見るに至っています。日本のア

図13. 1961年、ゴンベ・ストリームにジェーン・グドール女史を訪ねる。
左より東滋氏、そのうしろ今西先生、私、ジェーン女史。

図14. マハレ山塊野生生物研究所センターは、セレンゲッティ研究所の支所として設立され、この建物は日本国際協力事業団の手によって建てられた。背後の山はチンパンジーの生息地、右端は長谷川寿一氏、左から二人目、長谷川真理子氏。

フリカ研究が、霊長類学を原点としていろいろな分野への広がりを見せたということも、私たちが誇りうることのひとつだといってよいと思います。

JMCは発足の当初から、人類進化の解明を目指す社会学・生態学と、実験動物学との協力によって進められてまいりましたが、研究分野はさらに広がりを見せ、比較形態学、心理学などのスタッフも加わりました。1962年に高崎山でおこないました餌づけ10年目の総合調査には、社会学、生態学、心理学、形質人類学、歯学、生理学、臨床診断学、口腔医学、ウィルス学、寄生虫病学などの専門家が参加しました。それは、JMC発足わずか6年にして、多くの分野から霊長類への関心もたれるようになったことを示しています。

こうして、霊長類の研究が基礎になって、1962年には京都大学理学部に自然人類学講座ができ、この講座が概算要求の申請母体となって全国共同利用霊長類研究所を京都大学に設置する計画が進められました。この構想は、人類学民族学研連から学術会議に提出されましたが、動物学、神経生理学、医学、実験動物学などの分野からも強い支持を得たと聞いておりますし、名古屋鉄道株式会社からは用地の提供を受けております。霊長類研究所は1967年に設立され、あと2年で20周年を迎えようとしています。このあたりのことは、皆様の御記憶に新しいことと思いますので、これ以上申しあげません。のちに、わが国の霊長類学の現状と課題について少しばかり私見を述べさせていただきますと思うのですが、それに先立って古い写真を少々御覧いただきたいと思います。

戦後の30数年の霊長類学の歩みは、人類のアイデンティティーを大いに変えてきたと言っても過言ではないと思います。この間に、われわれの社会の経済や生活はずいぶん変わってまいりましたが、私たちは私たち自身の人間の本質に大きな変化があったという自覚はもっていないといってよいのではないかと思います。そういう内なる変化の自覚をもたない人類を、霊長類学は外から変えていったのです。私たちが若かった頃には、ヒトとヒト以外の霊長類を隔てる深い溝はいくつもあ

り、それらを十指をもって数えることは容易なことでした。そしてそれらは、とりもおさずヒトを定義することのできる特性だと見なされていました。ところがこの30数年のうちに、それらの溝の多くが埋め立てられ、あるいは半ば埋め立てられてしまいました。それはまさに、外部からの人間観の改変であり、19世紀の半ばにトーマス・ハックスリーが『自然における人間の位置』の中で予言したことの具現にほかならなかったのです。

これらの成果の中で、日本の霊長類研究者が果たした貢献が非常に大きな位置を占めたということは申すまでもありません。最初日本人の研究は、欧米の研究者からなかなか理解されませんでした。戦後の霊長類学は日本が欧米に少なくとも10年は先行したのですが、この不理解が日本の研究の国際的評価を長い間阻んできたように思います。

その理由をいろいろと考えてみる必要があるのですが、その一つは、日本の霊長類学は科学の他の諸分野のように、西欧に学びそれを日本に持ち帰ってエラボレートするという道をとらず、土着の学問として育ってまいりました。このことは、私たちの霊長類学の中に、きわめて素朴なかたちで、日本の文化的伝統や、日本人としてのごく一般的な思维方法や、宗教的背景なども包含されているということにほかなりません。そういう文化的背景と私たちがとってまいりました方法論につきましては、これからもより深く考える必要があると私は思っています。私たちのもっているものがすべてよいというわけではありません。しかし少なくともちゃんとした自己評価をおこない、伸ばすべきものは伸ばすという態度が必要なのではないかと思います。

そういう問題の中から一つ二つ重要な課題を取り上げてみたいと思うのですが、まず、これは今西先生がこれまで口を酸っぱくして言ってこられた“歴史主義的立場に立った比較社会学”という領域なのですが、これはおそらくわが国の霊長類学にとってもっとも特色のある分野だといってよいのではないかと思います。科学は大きく自然科学と人文・社会科学とに分かれます。霊長類学

の研究は、欧米におきましてもまた日本におきましても、主として自然科学系の研究者によって進められてまいりました。しかし霊長類という対象は、人文・社会科学的な対象でもあるということ、人文が悪ければ猿文でもよいのですが、必ずしも生物学的かつ還元主義的な方法のみに依存することのない、社会科学としての独自の方法論と理論を構築しうる対象でもあるということを、改めて認識しなおす必要があると私は考えるのです。当然、霊長類の社会を対象とした自然科学的な領域があることを私は否定はいたしません。しかし、これまでに日本の研究者があげてまいりました成果の多く、文化にしましても、言語の起源や社会の起原にしましても、社会構造の問題にいたしましても、これらはいずれも非自然科学的な問題であるということを認識せざるをえないのです。言語や文字はなくとも、行動学が扱う同じ行動という所与に頼りながら、社会科学的な独自の理論を、つまり霊長類社会のための理論そしてその新しい見地からやがて人間社会にも敷衍しうる理論を立てることは決して不可能なことではないと私は考えます。

この領域と生物学との関係につきましても、今後十分な検討を必要とするように思うのですが、それによってまた、無駄な努力も避けることができるのではないかと思います。一つだけ例をあげておきましょう。それは象徴的な例だといってよいのではないかと思います。順位と繁殖効率の相関を求めようとする試みがこれまでにずいぶんおこなわれてまいりました。つまりこれは、順位という純粋に社会学的な現象を、繁殖効率によって、つまり生物学的に意味づけようとする試みなのですが、実にランダムな結果しか得られていないということは、皆様が十分に御存知のことと思います。

もう一点指摘しておきたいと思います。このことは、去る7月9日に東京で開かれたシンポジウムでお話ししたばかりですから、詳しくは申しあげません。1952年に今西先生が「人間性の進化」というエッセイを発表され、カルチュア論を展開されました。カルチュアの研究はその後見事

に開花しましたが、このエッセイの後半はパースナリティ論で締めくくられているのです。そしてこのパースナリティ研究は、ほとんど手がつけられぬままに今日に至っているということ、私はとくに申しあげておきたいと思うのです。皆さんがこれまでに集められた多くのデータは、性差や、年令差、優劣や、血縁間の差や、群間の違いを明らかにし、それらについて論ずるために用いられたのですが、どういうわけかそれらが個体に還元され、行動の統一系としての個性の把握に用いられることはなかったのです。私は、社会と個の問題は社会学における永遠の課題であると考えています。個性を不問とした社会学は片肺飛行にも等しく、私はこの領域が新たな転機を迎えることを願ってやみません。

私自身の分野と関心に片寄ったお話しをしてしまいましたことをお詫び申しあげなければならないのですが、この機会にあと三つの点を加えさせていただきますと思います。

その第一は、これまでに長期にわたって個体識別に基づく観察が続けられてまいりましたフィールド、ニホンザルの幸島、勝山、嵐山、地獄谷、屋久島、チンパンジーのゴンベとマハレ、ピグミーチンパンジーのワンバ、マウンテンゴリラのカリソケ等が、今後の霊長類学の発展にとっていかに貴重な存在であるかという指摘です。今後これらのフィールドは、社会学、生態学、心理学の研究者のみならず、さらに広い分野から関心がもたれるようになると思います。今日までこれらのフィールドは、限られた研究者のなみなみならぬ努力あるいは公園管理当局の努力によって維持されてまいりました。いま私に成案があるわけではございませんが、これらのかけがえのないフィールドの維持に、将来は日本霊長類学会が何らかの形で大きな力になりますことを期待したいと思っています。

第二は、野生ニホンザルの保護に関する問題です。私もこの数年間、京都府と奈良県の猿害とその処置にかかわってまいりました。一言で申しますと、野生ニホンザルの現状はまさに末期症状を呈していると言つてよいのではないかと思います。

以前、ニホンザルの一つの群れの遊動域の広さは 5 km^2 あるいはそれ以下といったものでした。今日の群れの多くは 30 km^2 以上もの遊動域をもっており、さらに人里におりてきて農作物を荒らします。京都府の美山町、和知町といったところでは、杉や檜の人工造林が山林の70%以上を占め、従来の広葉樹は激減し、山の中はサルにとって不毛の土地になってしまっています。これまでも、日本モンキーセンターや霊長類研究所等の方々がずいぶん努力してこられた問題なのですが、これを少しでもよい解決に導いてゆくというのもこの学会の大きな務めではないかと思います。

最後に、霊長類学を志す若い人びとの就職状況が、かつてない困難な事態にあるということを訴えたいと思います。就職問題の解決は学会の事業とは無縁かもしれませんが、社会的な信用の厚い立派な学会をつくることは、この問題の解決とけっして無縁ではないと私は信じております。

勝手なことのみ申しあげましたが、以上をもちまして私の講演を終わりたいと思います。皆様とともに、本学会の発展、そして日本の霊長類学の進歩を祈りたいと存じます。御清聴ありがとうございました。（日本霊長類学会設立総会記念講演より）